

随想

今時の子供に望みたいこと

柔軟な感性失わずプロとして生きてほしい

（株）P P Q C 研究所 加藤 宏光

《今時の子供》という、あまり良い話が繋がらないことが多い。とかく否定的な批判話になるものである。著者も、つい「最近の若い世代は…」といっ

てしまう、年寄り世代である。とくに《ゆとり教育》という、時の為政者の犠牲となつた世代が社会の一員として社会、デビューしてきている。昨近、時にその世代と接して会話すると、著者

世代の常識がまったく通じないことに愕然とする。性格は善人であるが、モノを知らない、気働きができないうんぬんと、社会人としてはあまり望まれない要因が数えられがちである。

平成三十年七月十二日、東京新聞の朝刊五面《発言》に若者の声を紹介されている。若者と

いってもローティーンの投稿である。全投稿数は六件、投稿しているのは、最も若い人は一歳、最年長が二二歳でメインは一三〜一四歳の中学生である。大学生（一九歳）のテーマは

《政治と国民の受け止め方をサッカーW杯を看に分析する》というものであり、もう一人の大学生（二二歳）は《皇室の在り方を高円宮家の絢子さまの婚約をきっかけとして考える》というものであった。一方、一三歳の中学生（男子）は《ミスをした選手を責めるのは酷》とテーマして、サッカーW杯でミスを責めるより、純粋にスポーツを楽しむべき、と述べている。

また、もう一人の二三歳（女子中学生）は《動物保護施設で保護されている犬を飼うに至っ

た際の動機と心の動き》を「お母さんに『犬を飼うなら保護犬にしよう』と言われ、インターネットで調べて保護犬の中から自分の飼う犬を決めた」と経過を記述している。インターネッ

トで調べたのは、「保護施設でたくさんいる保護犬から一匹を選ぶのが辛いから」とも述べている。心根の優しさが伝わってくる。

一四歳の中学生（女子）は《食を通して遠い国に関心》というテーマで、遠い国で作られた干しナツメヤシを初めて食べて、その国に思いを馳せる心根、がつづられている。ナツメの生産国が中東地域であったことから、イスラエルでのアメリカ大使館移設問題等、中学生としては遠い国でも遠い出来事を身近

には、その言葉の重要さをわかってもらいたい。言葉は一度言ったら、取り消せないからね。》

それぞれを比較すると、年齢毎に考えている事柄、深度が成長していることが感じられる。先に述べた、ゆとり教育の世

代も感性としてはその時期、時期で例に挙げた子供たちと同じように考え、感じて大人になつてきたのであろう。

とくに、この小学生はちよつとしたイジメの被害者になつているのかもしれない（本人が重く受け止めすぎの可能性もあり）が、自然体で言葉のイメージをコラムに含めているように感じられる。

著者自身が一歳から一四歳の時代を思い起こせば、まだまだ遊びほうけ、子供同士で仲間を作り、離反し、時にのり合い、時に慰め合つて日を過ごしていた。

思えば、野球選手や卓球選手あるいはフィギュアスケート選手等々、時には幼年期からの親の特訓に耐え、スペシャリストとして育てられている。以前に

取り上げた卓球の張本智和選手は、二歳でラケットを握り、小学一年生でバドミントンの部門で優勝する等、天才ぶりを発揮している。

彼の両親は共にスーパーレベルの卓球選手であったことから、家庭環境と特質があつたこととは否めまいが、女子の早田ひな選手のように両親共に卓球とは無縁でありながら、四歳ですでに競技に目覚めていた天才もいる。

いつの時代にも、天才的な人はいるものであるし、才能を開花させるのに、天分を自覚することは必須であらう。

《好きこそものの上手なれ》という言葉がある。《何事によらず、好きであれば熱中するので、上達も早い》という意味である。プロになるのに専門が好きであることは幸せなことである。

大変な職業に《看護師》がある。ある意味、医師より大変な職業である。著者の父親が亡くなったときに、世話になつた病院での看護師のプロとしての姿

勢に感動したことが思い出される。同じ日の同じ新聞（社会面）に元看護師が点滴によって連続殺人を犯した事件が記述されている。この中に、逮捕されている久保木愛弓容疑者は、「患者の要望に応えることが多く、仕事に嫌がった」という趣旨の供述をしている、との取材情報がある。

任意の事情聴取では「勤務時間中に入院患者が亡くなると、遺族への説明が面倒だった」とも述べている、という。さらに、記事によれば、《久保木容疑者は別の病院に勤めていた時から遺族への説明が苦手だったとい

い、以前から死後時のストレスを感じていたと見られる。――中略――大口病院（久保木容疑者が勤めていた病院）では二〇一六年七月から事件発覚の同年九月までに四八人の入院患者が死亡。久保木容疑者は「二、三か月前からやつた」としている。――中略――体内から界面活性剤の成分が検出され、久保木容疑者は二人の殺害

に感じる必要性を主張している。さらに最年少の一一歳の小学生（男子）は《死ぬ》の言葉重さを知って！と切々と述べている。この意見はとくに引用してみたい。《死ぬ》。そんな言葉あつてはいけない。僕はそう思う。最近そんな言葉を言っている人をよく見かける。というか、僕が言われている。本当に死んでほしくなるようなことを僕がしたのかな。したのなら謝りたい。たぶんしていない。なんでだろう。僕は生きています。みんなもそうだと思います。お母さんのおなかの中から生まれ、一一年間育ててもらっている。そんなにもたくさん時間、生きてるのに。「死ぬ」とか「殺す」とか言っている人たちを認めている。看護師や弁護士という専門職は、辛く重い業務内容で、その割に報酬が少ないことがよく知られている。つまりは、患者や介護されるヒトからの《感謝そのもの》が心理的な報酬として受け止められないとなかなか務まらない仕事である。それ故に、《奉仕すること自体が好きだから》選ぶ人々によって支えられている（と著者は理解している）。この不幸な事件引き起こした容疑者も、彼女の青春時代には、先に挙げたティーンエージャーの前向きあるいは柔軟な意見と似た感性を持っていたのである。その彼女が、いつの間にか、悪夢のような世界に紛れ込んでしまう。

同じ新聞の同じ日付に記載されている、あまりにも異なる現実、考えをいたした次第である。「望んで選んだ道で、プロとして生きてゆくことを、どの若者にも貫いてほしい」と切に望むものである。